

江戸期以降における

山形両所宮の祭祀

新 関 慶 子

一、山形両所宮

山形の城下町の北のはずれ、羽州街道のそばに鎮座する両所宮は、正しくは鳥海月山両所神社となえ、鳥海大物忌神社と、月山神社とから成っている。祭神は鳥海大物忌神社は倉稻魂命、月山神社は月読命としており、両所権現といっていた時代には、薬師如来、阿弥陀如来をそれぞれの本地仏としていた。城下の鬼門除けとしてこの神社は、一名「武門吉事宮」とも称し、城主の寄進や社殿等の修造がたびたびなされている。境内は、入口に明和九年再建という楼門、正面には南面して拝殿、その奥に、東側に月山神社、西側に大物忌神社の各本殿、続いて東に摂社の城輪神社、熊野、若宮八幡、愛宕、日枝の各末社、西側の片目の魚が住むという池の囲りに、稲荷、厳島、天満宮、水神の各末社の祠がある。昭和十八年の印刷物によると、このほか境外末社として印

役町と小橋町の二神明神社が記されている。また、延享以後と思われる地図や「出羽国風土略記」⁽¹⁾には摂末社十社として、城輪大明神、山王大権現、摩利支天、若宮八幡、薬師堂、熊野権現、弁財天、稲荷大明神、天満宮、印鑰神明宮とあり、現在とは多少の変化が認められる。

両所宮の氏子区域は、本町（もと横町）以北十七ヶ町で山形の町のおよそ半分の広さを占めている。八月一日の例祭の神輿渡御の際は、二基の神輿が分担して一日がかりで氏子町内を廻っている。十七の各町には一人ないし二人の責任役人がおり、主要な事柄のとりきめをおこない、さらに各町には四、五人づつ、計五十三人の氏子総代がおり、その年の年番に当たった町の総代が寄附集めや例祭の会計等諸事の世話をする。

この両所宮は明治十二年県社となり、現在神社庁のもとで別表神社として扱われている神社であるが、創建についてはその当時の記録がなく、後世の資料しかない。宮所蔵の縁起の巻物や江戸時代の郷土誌ともいうべき諸記録では、康平六年鮑海郡吹浦の大物忌神社、月山神社を勧請したとしている。すなわち、前九年の役で、陸奥守兼鎮守府將軍源頼義はその子義家と共に安倍頼時、貞任と戦ったが利あらず、奇異神変の靈驗をあらわすという出羽国鮑海郡大物忌神社に戦勝を祈願し、勝った暁には国内に一祠を設けると誓約した。康平五年九月十七日厨川の戦いで安倍一族を降し、前誓の新祠を同六年正月十八日村山郡金井庄最上郷山形に設けたというものである。

さて鳥海山は飽海郡と秋田県由利郡との間に聳える二千三百三十メートルの「出羽富士」とよばれる山で、一方の月山は西村山郡と東田川郡の境にある千九百八十二メートルの山で、低い山々の多い、また海に近いこの地方ではかなり目立つ存在である。鳥海山の大神忌神、月山の月山神は自然崇拜の古くより信奉され、蝦夷征伐の祈願や、国府が近くに置かれてから一層、夷狄の鎮定国家泰平、五穀豊饒の祈願がなされた。二神の叙位叙勲の記録は承和の頃より見られるが、田川郡にある月山が「三代実録」仁和元年十一月二十一日の條に『飽海郡大物忌神月山神』とあり、「延喜式神名帳」にも月山神社が『飽海郡』と記され、また同「主税上」に『月山大物忌神祭料二千束』とあることから、この頃すでに二神は飽海郡吹浦に祀られていたものとみられる。

新祠を設けるにあたって山形の地が選ばれたのは、山形の町の東、馬見ヶ崎川を隔てた山家の豪族、安倍富忠が康平五年出羽権守に任ぜられており、康平六年出羽守となった義家の代理として政務を執っていたため、権守の便宜上、また清浄な湧水のある地として現在の地が選ばれたのであろうという。この康平六年の勧請には頼義の陣中僧であった藤原宗円のはたらきによる、との説がある。宗円は粟田関白家の子孫で、のちに宇都宮社務検校職となった人物である。羽黒と宗円との関係は「拾塊集」にみられるが、両所宮との関係の記されたものは未だ見ることができない。また、吉田東伍博士の「大日本地名辞書」には次のように記されている。

……印鑰祭の遺例及び国分寺の此地に存在するを想へば、本祠は惣社に擬すべし。蓋、中古出羽の旧府廃亡し、斯波兼頼の探題館此におくや国人視て府城と為し、旧府の惣社国分寺も最上城下に米還したる者か。……（山形両所宮の項）

印鑰祭は後述の如く印鑰神明宮の祭官の欠のために両所宮の社人によって祭祀がなされたにすぎず、また両所宮の惣社としての記録は何も見つかっていない。

両所宮としては康平六年吹浦より勧請の説をとって、昭和三十七年を九百年として八月一日の例祭を大々的に行なっている。

ところが源頼義・義家の創建とする神社は数多くあり、特に八幡神社にその例が多くみられる。村山地方の総神社八百三十余社の内八幡神社だけでも四十八の縁起がそうである。康平六年には頼義が石清水八幡を由比へ勧請したのであって、これら地方の八幡神社を義家、頼義による勧請とするのはいい伝えにすぎない。しかし両所宮が新たに単独に鳥海大物忌神、月山神を祀ったという記録もまたない。村山地方は庄内地方より開発が遅れたのに、吹浦に存在する以前に遠い地にある鳥海大物忌神や月山神を内陸の山形に祀ることは考えられない。また、のちにそのような神社を創建する場合、すでに式内社として名の高かった大物忌神社を無視することはできないと思われるし、祭式などで多くの共通点がみられることから時代は不明にしる、吹浦の大物忌神社、月山神社を勧請したものと思われる。

二、「祭記」よりみた江戸時代の両所宮

現在、両所宮の南一帯を「宮の内」と称して、もと神社に關係した神宮寺や社人の子孫が住んでいる。現在も禰宜をつとめ、先祖が社人であった中野宮之介氏宅や同じく社人の子孫である里見禎二氏宅、花藏院であった神谷健夫氏宅、神宮寺であった宮城重氏宅に江戸時代の祭祀の様式や朱印領のことなど、神社に關した諸事が記録されている「祭記」がある。この「祭記」は享保十一年のもの二冊、延享元年のもの、寛政十二年のもの、寛政以降と思われる断片のもの四種類がみられる。いずれも書き方に詳細、簡略の差はあっても、内容の根本的なところは殆んど同じで、時代によって人名が変わっている程度である。この「祭記」によって江戸時代の両所宮というものをながめてみよう。

(イ) 社領及び社僧・社人の構造

両所宮は社領として六百八十九石の朱印地を受け、内、百二十九石は社人二十一人分で五百六十石は別当である成就院が受けている。ほかに神宮寺三ヶ寺がそれぞれ

高八拾六石 平地山神宮寺宝積院如法堂
 高八拾五石 平地山神宮寺花光院護摩堂
 高五拾五石 平地山神宮寺寿量院内御堂
 と、朱印地を所有している。

成就院は本寺を御室仁和寺とする真言宗の寺で、いつ山形に建てられ、仁和寺との關係はどの時代からなのか不明であるが、天正二年、時の城主最上義光の弟義時が、兄を除こうとして両所宮別当須藤留守に托して義光調伏の祈禱を行なわしめたことが露顯し、義光は須藤留守を追放して義光の祈禱所であった成就院を別に任じてからその存在は大きなものとなってきた。

神宮寺としこの如法堂、護摩堂、内御堂はいつから存在するのか不明だが、寛永六年の大僧正天海による法度状(写)に

「右三ヶ寺者両所宮草創以來□

□今迄無退転天台宗之法流を相統……」

とあることから成就院よりは古くからあったものとみられる。三ヶ寺は柏山寺(山形市薬師町)を本寺とし、東叡山寛永寺の支配を受けていた。

出羽国では山寺立石寺や羽黒のように、古くから寺社領を有したところもあるが、斯波兼頼が光明寺を建てて寺領を寄進したり、その後最上家の一族が菩提寺を建てて寺領を与え、さらに義光が庄内その他の土地を領有した際、盛んに寺社領を寄進している。この寺社領に検討を加えて幕府より朱印状が下された。出羽国の内朱印地の多いところは、慈恩寺の二千八百石、羽黒の千五百石、立石寺の千四百石などで、山形の町の内では光明寺が千七百六十石、真言修験の宝幢寺千三百七十石、天台宗柏山寺三百二十石、同宝光院二百七十石、禅宗光禅寺二百五十石、社領としては八幡神社四百十八石、熊野神社が百五十石、などがその主なと

ころである。朱印地をもつ社寺は多いが、幕府は朱印地を与えることによって、その統制を計ったのであろう。山形の町の寺社の総朱印高は六千七十石で、その内両所宮関係は一割四分ほどであり多くはないが、一神社としては光明寺、宝幢寺に次いで三番目であり、地方の大社としての両所宮の一面をあらわしている。

両所宮関係の朱印状は慶安元年を最初として、寛文五年、貞享二年、享保三年、延享四年のものが見られる。朱印地の伏所は飛び飛びにあって、それがさらに細かく分割され、大きいところで一町歩どまりである。

社人領は義光時代に三百二十九石下されていたが、朱印領となつてからは社人が二十一人に整理統合され、石高も百二十九石と定まった。社人の内、最高が里見主膳二十一石五斗余、田所八郎十三石六斗余、田所半治十二石五斗余、鬼沢長門八石二斗余などで最少は一石である（延享元年本）。この二十一社人の内には權威の大なる社家、実力者の社家がみられ、主だった七つの祭式の直会の際の座式に認められる。「祭祀」の中に、「御宮年番年中定之事」として一ヶ月の当番の日割が記してある。十日より晦日までの二十一日を二十一社人が一日づつ受持っているが、十五日、二十三日の重要な日を座式で主要な位置を占めている人が受持っている。この座式は時代によって多少上下の変遷がみられるところを見ると、二十一社人の内朱印高は変らなくとも、その家の隆盛如何によって座式が変わってくるのではないかと思われる。この座式は吉田家の裁許状によって定められるので、上位の

座を得るには経済的な面の要素も関係してくるものとみられる。二十一人の社人すべてが祭式に参列する訳でなく、もっとも多い六月十五日の大祭でさえも十五人である。五月五日の流鏑馬神事の馬乗の一人は、その神事のために、社人でありながらより有力な社人のもとで五日間の別火潔斎をしている。これは馬乗の家柄でありながら、物忌の場としては不十分な社家、すなわち、社人としてのみの生活ではなく、他の生業をも営んでいたのではないかということが考えられる。当時、寺社関係の人々が一般より良い位置にあったとはいえ、二十一人もの社人では、その末端の人は社人のみに甘んじていられたものではなからうか。

(四) 祭式

この「祭祀」の記された目的は、毎年祭式をとり行なうにあたっての参考のためと思われる。祭を執行するに際して、誰が何をし、何を提出するか、ということが主要な内容である。この記録には大小すべてを含めて十九日の祭式が記されている。なかでも、正月十五日、二月神祭、五月五日、六月十五日、九月九日、同十九日、同二十九日の祭式が比較的大きく扱われている。五通の「祭式」の内容は殆んど同じで、それに携わる人名が違っている程度である、その主な祭式を享保十一年本を中心として略記しよう。

正月十五日 印役之祭

これは両所宮から四キロメートルほど東にある印役町の印鑰神

明宮の祭式で、この祭式を両所宮の社人がとり行なっていたものである。「印鑰神明宮縁起」には寛文五年祭官原田清太夫が歿したあと、継子なく、それ以来撰社の関係であった神明宮の正月十五日、九月二十九の祭式を両所宮社人十二人で勤行した旨記されている。以来明治まで両所宮と印鑰神明宮はつながりを持つようになる。

正月十八日 勸 請 祭

この宮の勸請を記念しての祭式であろう。縁起などに康平六年正月十八日勸請とある。古くは勸請札を最上出羽守へ差上げたのでそれにちなんで勸請札を当時の領主へ差上げる、という行事がなされているがその勸請札とはどういうものか不明である。最上出羽守は元和八年まで続くので、少なくともその頃までもとの形の祭式が行なわれていた行事であろう。

二月 御 榊 祭

正月より三寅目の申の日に行なわれる。この神事の前に七日間「せんたく、あくたて不申候」とあるように物忌を行なう。申の日の当日には赤飯、甘酒、大根、蕪、薪、大豆から、にしん汁などを神前へ捧げて祭祀を行なう。秋の豊作を願う祈念祭である。この様式の祭式が同日、吹浦の大物忌神社でも行なわれている。両者の関連がうかがえる。

五月五日 祭 式

この日は粽、洗米、うど、箒の子、ふき、わらび、みずを八膳整えて神前で読経等ののち、下り膳を三神宮寺や柏山寺、四社人へ配分する。終って七つ過ぎから流鏑馬が行なわれる。

六月十五日 大祭礼之式

早朝長床において神樂があり、奉幣祝詞のあと長床で直会が行なわれる。同日七つ過ぎに五月五日の時のように流鏑馬がとり行なわれる。六月十五日を、大祭の日とするのは何故かわからないが、秋の稔りまで天候順調にして病虫害のないことを祈り、五穀豊饒、天下泰平を祈願したものだと思われる。吹浦でもこの日、月山神社の例祭がなされていた。

両所宮の座次改めや社人の相続はこの大祭をもってなされたようである。

七月朔日 五 穀 納

現在もひき続いて行なわれている唯一の行事で、三宝にあわ、ささげ、きうり、稲穂、茄子を調べて楼門の脇に埋め、その上にぼんでんを立てて、翌年六月晦日にほりおこし耕作の吉凶を占う行事である。この名称は古くは「おだいやすめ」というと記されており、元治元年のものには「穀タメシ」と載っており、この頃からすでに現在の「穀様し」の名称が存在していたのである。

九月九日 祭 式

長さ二尺二寸、巾一尺二寸、厚さ五分の「大杓形餅」一名「せなかいち餅」を十六枚用意して、内二枚を御飯、おから、数の子、くり、大根、かきを整えた膳と共に二神前に供え、また他の撰末社も各守となっている社家でも前記の餅を供えて祭祀を行なう。三九日の第一の九日、神の九日といわれるこの日は、新しい米で餅を搗き、お供えして本社、撰末社の神々へ感謝の意を示したのであろう。この餅の形、大きさの意味はわからないが、八月十五日の八幡宮祭式の引物にもこの杓形餅が用いられていることから、当時の祭りの際の一種の餅の形であったのかも知れない。

九月十九日

第二の九日、神人たちの九日には準備した赤飯、甘酒、大根、青の魚を三ヶ所の集りに運んでそれぞれ祭式をおこなう。

九月二十九日

正月十五日と同じ印役町の神明神社の祭式で、正月は秋の稔りを祈るのに対して九月は収穫に感謝する祭りであろう。

十二月廿日

正月十八日と同じ。

以上述べてきた祭式は記録としては享保から寛政までにすぎな

い。しかしその間を通して祭式が全然変わっていないことから、この様式が相当長く続いていたのではないかと思われる。いつの時代からこの様式で行なわれていたのかは不明であるが、最上出羽守との関係行事がみられることから、少なくとも天正、慶長の頃まで遡ることができるのではないだろうか。また逆に、明治のはじめに出された取調帳に祭日がほぼ同じく記されているので、以上みてきた祭式が江戸時代を通して行なわれていたとみて良いであろう。また祭日や様式が吹浦の大物忌神社の祭式と似通っている点が多いことは、この山形両所宮が吹浦から勧請してきたものとうかがえる一因である。

三、現在の祭祀行事

(イ) 現在の神事

江戸時代に行なわれてきた祭祀は明治になつて後も、しばらく続いたものである。しかし排仏毀釈によって薬師如来を薬師町の薬師堂へ預け、別当、神宮寺はそれぞれ復飾改名して「宮」という姓をつけて社人と共に奉仕していたが、成就院の子孫が他所へ移り住み、神宮寺の一軒も転居したりして現在は二十一社人のうち十五軒に減っている。しかも神職を続けているのは中野氏のみである。明治から大正、昭和にかけて祭式は大きく変わってきて

き、水を少々かけて石をかぶせ、土を盛って元通りとして行事は終了である。判定の結果は、昔は農家の農事計画を大きく左右したが、現在は利用されていなくとも附近の農家に配っている。

大 祭

現在八月一日に行なわれているが、これは明治よりのこととみられる。江戸時代の大祭、六月十五日は奉幣、神楽などの奏上があつて流鏑馬が行なわれたが、現在では二基の神輿渡御が「お祭り」と考えられている。この神輿は安政三年、大阪・京都の間屋筋から奉納され、同年八月六日はじめて渡御があつた。この渡御は華々しい行列であつた模様であるが、その後渡御は中止され、文久二年より毎年行なわれるようになった。現在、朝神輿が神社を出発したあと、神社では数人によって小端で作った的を弓で射る真似をする行事がある。これは流鏑馬神事の名残りの行事とみられる。

(四) 講

現在、両所宮にはいくつかの集りがある。

A、氏子による本社、摂社、末社を祀る集団。

1、宮町本通り、上組、中組、下組
いずれも一月十五日に日待を行ない、下組の場合、向う三軒両隣りが手方として世話をする。宿は毎年廻り、宿では鳥海月山両

神の掛軸をかけ、神職による祝詞奏上ののち直会を行なう。そのあと本殿に参拝して解散となる。

2、城輪神社講中

地主神とも飽海郡の城輪神社を勧請したともいわれるこの神社は、本社と東側に鎮座する摂社で、その建物は桃山時代初期のものとして県文化財に指定されている。これは四月二十六日、三十人ほどでお祭りを行なう。同時に東側の四末社をもまつる。大正八年頃から行なっているという。

3、稲荷神社講中

これも大正八年前から行なわれたもので、旧暦三月十五日、二十五人程でとり行なう。

4、厳島神社講中

現在の地に祀つた五人の子孫によって旧暦四月初己の日に、そばの天満宮と水神宮とを一緒にして祭りをおこなう。

いずれも講員一人当たり二百円位づつ出し、料理代や神職への初穂代とするが、現在では経費過剰で、当番宿の負担が大きいという。

B、もと社僧、社人であつた家々の集団

5、桝 組

もと社人で現在も子孫がそこに住む家々十五軒と新たに移つて来た家三軒から成っている。勧請してきたという一月十八日に日待を行なう。四軒グループで一切の世話をし、内一軒が宿となる。両所宮の掛軸を掛け祝詞奏上等のあと飲食をし、決め事をする。

6、吉事組

もと成就院であった土地を使用している九軒の家々と、もとの護摩堂、内御堂の十一軒から成り、正月十五日に日待を行なう。

7、お構かまい

もと成就院に出入りしていた九軒の集りで、年三回、正、五、九月の十四日に日待を行なう。

8、甘酒講中

明治のはじめからなされているもので、十二月の大晦日から元朝にかけての参詣人に甘酒を振舞う。十二人から成り、彼らは十二月に入ると寄附金や米を集めて甘酒を作る準備をする。

以上のように殆んどが新しい集団である。一切が社僧や社人になされていた祭祀は、制度が変わってから一般の氏子も祭祀に関与するようになった。

四、結び——両所宮の性格

「祭祀」にみるように江戸時代の祭祀には社僧、社人だけが関与していて、一般の農民・町民は何も携わっていない。江戸末期の神興渡御や神興新造関係文書に「講中」として氏子の集団がみられ、境内の燈籠の奉納者の中に町人の名がみられるが、一般の人々の比重はいたって軽いようである。このことは神社の性質を

示すものと思われる。すなわち、この神社が祀られるようになったのが氏人が氏神を祀るというやり方とは違ったものであったのではないかということである。五穀豊饒もさることながら、「武軍吉事官」として武士の神社という性格が強かったのではないだろうか。最上義光によって社領が寄進され、社殿や鳥居が修復新造されたり、義光の参加する行事があったり、さらにまた明和頃の記録「御本丸へお目見え御参上之間十二ヶ寺」の中に成就院が含まれていたりしている。このように両所宮は一般の町民や農民たちの神社よりも武将によって信奉された神社であったということができよう。このことはまた、類型的な頼義や義家のいい伝えは別として、古くから国司や武将によって戦勝を祈禱された吹浦大物忌神社を勧請してきたことを裏付けるものの一つになるのではないだろうか。

そのような神社が、朱印地として包含されていた山形城下町の発展につれて、幕末にいたって、町人百姓の発言権の増大を来たし、かれらの祭祀への参加をみとめねばなくなり、ついに近代においては山形の町のおよそ半分ほどを氏子区域としてもつようになり、幕府や領主の保護の絶えたあとも、今にそれによって維持されるようになった。

附記、この研究にあたって山形市中野宮之介氏・里見禎二氏から古文書閲覧の便宜をいただきました。あつく御礼申し上げます。

註

- (1) 吹浦大物忌神社の神官である近藤重記の著。宝暦十年から十三年にかけて書いたもの。十巻より成る。
- (2) 寛延元年十一月に成り、最後に「依当社所伝之旧記」とある。
- (3) 「山形故実録」 著者不明、元禄十年頃。
「山形風流松之木枕」 著者は後藤屋（旅籠屋）の隠居、明和六年頃のもの。
- (4) 続日本後紀、承和六年冬十日乙丑の條
同 同七年六月乙酉の條
同 同七年秋七月己亥の條
- (5) 和銅五年出羽国設置後の最初の国府の位置には定説がなく、次の四説がみられる。
① 東田川郡旧横山村助川
② 同 旧広野村
③ 同 旧藤島町古館
④ 同 旧渡前村平形
- (6) 大物忌神の叙位叙勲の初見は、
承和五年六月丁卯。奉_レ授_二出羽国従五位上勲五等大物忌神正五位下_一。餘如_レ故。（続日本後紀）
月山神の叙位叙勲の初見は、
貞観六年二月五日壬戌。授_二出羽国正四位上勲六等月山神従三位。正四位下勲五等大物忌神正四位上_一。（三代実録）
- (7) 川崎浩良著「山形の歴史」78頁。
- (8) 著者、成立年代共に不明であるが、一説には、文禄頃成立したものとされる。伝本最古のものは元和二年の「華蔵院本」である。
- (9) 最上義光の先祖である斯波兼頼は、陸奥探題斯波家兼の次男で、出羽按察使として正平十一年（延文元年）山形に入部した。以来領内をよく治めることに意を用い、神社仏閣の創建をはじめ、修造、寄進をよくおこなっている。天授五年死去す。
- (10) 現在寒河江市に在り（もと西村山郡醍醐村大字慈恩寺に在）、天台、真言両宗兼帯の寺で、天平十八年の開山という。